「春の嵐」

時津　逸

春の嵐の時期が近づいていた。

四月下旬、長崎港の近郊では二～三日ほど嵐のような雨風が吹くことがある。

千四百年前に弘法大師空海（こうぼうだいしくうかい）が唐を訪れる時も、この嵐に見舞われ船団は非難を余儀なくされた。その際に長崎港外の島の湾内に避難し、空海は天候回復の祈祷を行った。

その後に開山したのが香焼島（こうやぎじま）の円福寺（えんぷくじ）であるといわれる。

香焼島から香焼瀬を挟んで対岸が深堀（ふかほり）村である。佐賀の鍋島（なべしま）藩が城を構え瀬の海運を取り仕切り、商船の通行料から資金を得ていた。

その深堀鍋島藩の領地として香焼島も治められていたため、円福寺の宗派は、空海の真言宗（しんごんしゅう）から武家に多く広がっていた曹洞宗（そうとうしゅう）へと改宗されていた。

改宗されたとはいえ香焼島の村人の弘法大師信仰は厚く、曹洞宗でありながらも寺では弘法大師の像を祀(まつ)って空海を慕っていた。

対岸の深堀村の漁港から急な坂道の峠を登り、深堀城の裏手にある城山の中腹まで行くと一つのキリスト教会がある。

この辺りの大籠(おおごもり)地区は、古くから隠れキリシタン達が密かに潜伏居住していた。鍋島藩の御膝元でありながらその存在が続いたという事は、何らかの意図のもとに目立たないように加護されていたのかもしれない。小さな集落で秘密裏にその信は貫かれてきた。

時が明治となり、キリシタンの弾圧が形の上では無くなった頃から、隠れキリシタンの住民は表向きの活動も恐る恐る始めた。

集落で助け合いながらコツコツと大工仕事を進め教会を建てその信仰の場を設けた。

城山の中腹にひっそりと建てられた木造

の白い教会は善長谷教会と呼ばれた。山の斜面を切り開いて作られた教会は風光明媚で山鳥たちの鳴き声に囲まれていた。眼下には香焼灘をゆっくりと行き交う商船や鰯漁の小さな帆を立てた手漕ぎ舟が見えた。

新築されたキリスト教会は神父を迎えた。バチカンまで留学して修行してきた偉い神父様らしいが、どうしてそのような立派な方がこの片田舎に来てくれるのかは、誰にも分からなかった。江戸時代から独占的に海外貿易に携わってきた鍋島からの人脈があったのかもしれないが、人々が詮索することはなかった。

その教会には二人の若い修道女も暮らしていた。二人とも熱心なキリスト信者の子であり、幼くして親を漁で亡くしたり、病気で先立たれたりして身寄りがなくなった子を神父がひきとり姉妹のようにして育てたのだった。

ヨシは年下の修道女で齢は十四になる。

姉役の鶴江（つるえ）は二歳年上の十六だった。

緑の木々に囲まれた山の教会で、二人は早朝からお勤めを行い、神父様の身の回りの世話や家事、掃除、洗濯を行い、自分たちが食する分の農作物を育てるための野良仕事を行い、西の空から真っ直ぐに差し込む夕日の中で感謝の祈りを奉げながら夕食をとった。

夜のとばりが降り、山の教会がゆっくりと沈黙に包まれると、イエスとマリアへの純白の祈りと人々への愛を込めた祈りを行う。山の木々に囲まれた光もないひっそりとした闇の中でベッドに入る。

窓から見上げると、満天の星空だけは近く、今にも降ってきそうだが、風に揺れる木の葉のざわめき以外には何も聞こえない長い夜を過ごす。

そんな平穏な時間が淡々と流れていた。

ヨシが春嬰（しゅんえい）を初めて見かけたのは、教会

の下の深堀の漁村にある波止場だった。年端は自分より少し下に見える春嬰は、向かいに浮かぶ香焼島の円福寺の小坊主だった。

春嬰は色白で、綺麗に剃られた真っ青な坊主頭に切れ長の竜顔（りゅうがん）、鼻筋が異様に通っていた。長い首のうなじから立ち上がる絶壁頭が一度見たら忘れられない形をしていた。

桟橋に向かう道端に茣蓙（ござ）を広げ、女が野菜を売っている。小さな腰掛に座る中年の女とかわす春嬰の言葉が微かにヨシの耳に入った。

「で、その白菜はいかほど……」

気配を感じた春嬰が顔を上げると数尺先にヨシが立っていた。

春嬰は初めて目にする若い修道女の出で立ちと、醸し出す透明な雰囲気にはっとした。

すらりとしたヨシの立ち姿と清楚な振る舞いや微笑にしばし目を奪われていたが、

ヨシと目が合うと即座に海のほうへと目をそむけた。

青い坊主頭の春嬰の姿は数日たってもヨシの頭の中から離れなかった。お勤めをするのに目を閉じると春嬰の姿が浮かび、薪を割る手を休めると春嬰のうなじが浮かんだ。

イエス様の像を見つめ、瞼に焼き付けて目を閉じても十字架の後ろに春嬰の切れ長の目がこちらを見ている。

夢には度々あの日の深堀の漁村での風景が浮かび、自分は何やら親しげに春嬰と話している。内容はともかく、とにかく笑っているのだ。

仄(ほの)かな喜びの感覚だけが、目覚めても残っている。どうにかすると、その時の臭いや春嬰の口元や目線の動きまでもがリアルに浮かぶ。話の内容は残っていないのに。

村の日焼けした精悍(せいかん)な若者を見ても、長崎の市街に出て洒落た洋服を着た立派な男

性を見ても、そんな感覚を覚える事はなかった。誰にも言えぬまま、悶々と葛藤した日々が過ぎる。

ただ時間だけが滾々（こんこん）と過ぎていった。ヨシは年上の修道女の鶴江に何気なく聞いてみたことがある。男性への興味を持ったことはないのかと。

鶴江の態度はつれなかった。イエス様に身を奉げた自分たちが、その様な心を持つのは罪であると。その様な気持ちで男性を見ること自体が穢れであり、悪魔の囁きであると。神の独り子イエスの妻としてのみ我が身は存在するのであり、心での異性との姦淫は肉体としての姦淫となんら変わらないはずだと。

すぐに懺悔をし、身と心を清めるようにとヨシに強く薦めた。

ヨシは鶴江が男性への興味の事を耳にした瞬間の彼女の瞳の奥の情欲の炎を見逃さなかった。白々しくうそぶく彼女の言葉と

心の中には明らかに乖離があった。

女としての心と身体が整ったばかりの若い女性が、異性への興味関心が全くないわけはないのだ。

若くて格好の良い男には目が行き、顔を見、身体を見て何某か女としての感情は湧いてくるものだ。

その心の揺れは、若い女として当たり前のこと。そこを形だけ、体裁だけ整えて誤魔化すのはおかしいのではないか。

本能的な何かを押し留め続けるのは無理があるのではないか。

実際に鶴江の立ち振る舞いや着替える際の腰つきなども、ヨシの目から見て、最近、妙に色っぽく感じることがあった。

鶴江とて、何かを隠しているのではないか。そうは言っても、先輩の修道女である鶴江の後輩への回答としては正しいのだ。表向きはそう言うしかないのだ。ヨシは、とりあえず自らの心の奥底へと波風を沈潜させ

た。鶴江の白々しい嘘への怒りなども湧いてこなかった。答えなど見つかるはずがないのだ。

幼い頃からの静かな山の日々で、湖面のように澄み切った状態に強制的に保とうとされてきたヨシの心は、突然投げ入れられた小石により波紋が広がっただけなのだ。

今日も春嬰の低音の声が耳の奥に響いてくる。厚みのある唇が脳裏によぎる。

せりあがってくる感情と、浮かびくる春嬰の様々な姿は、ヨシの胸から消えてくれることはなかった。

数か月の後、鶴江は神父様の使いで香焼島に渡ることになった。

香焼島に隣接し、小さな橋一つでつながっている陰ノ尾（かげのお）島には、古くから隠れキリシタンが住み着き、その末裔が自分たちのキリスト教会を建設しようとしていた。

神父は妙に長い時間、鶴江と二人で話をしていた。話している距離が少し近く感じ

た。ヨシも同行することを期待したが、叶わなかった。

雲行きの怪しい港を出る鶴江が乗った手漕ぎ船は、小波に揺られながら香焼島へと向かう。ヨシは波止場まで出向いて鶴江を見送った。

緩く風が吹き始めていた。白く尖った波が立ち始める。ヨシは一瞬不安が頭をかすめたが、気にせず教会へと戻って行った。

鶴江の帰りは遅かった。

暗くなっても戻らないことを聞き、神父は顔色を変えて下の漁村へと急いだ。

雨脚がひどく、時折、突風が吹き上げる。ヨシはぬかるんだ山道を神父が転ばぬように度々支える。急ぎ深堀の魚港に下ると港に集まる漁師の男たちに様子を聞いた。男たちの顔は暗かった。

沖の風雨は荒れていた。香焼灘の流れは川のように早くなり、少し離れた瀬には白波が打上げ、荒ぶる波が岩の瀬を飲み込ん

でいた。

「春の嵐は突然やってくる」

日焼けしたふんどし一丁の漁師の男が沖を睨み、押し殺すようにつぶやいた。海小屋の軒先で燃える篝火は大きく焚かれ、火の粉が風に舞っていた。

男たちは絶望の中でも待ち続けた。狼狽しうなだれた神父の顔が篝火（かがりび）に照らされていた。迫りくる黒い海の波は、その魔手を陸にまで伸ばしそうに見えた。

鶴江の葬儀は善長谷の教会で静かに取り行われた。

信者の村人は若い天使の帰天を声を押し殺して悔やんだ。讃美歌が澄んだ山の空気に広がるように流れ、善長谷に鐘の音がこだまする。

野鳥たちの賑やかな合唱は止まず、緑の木の葉たちに吸いこまれていった。

春の時化（しけ）が残る灘のうねりが続き風はまだ強い。潮を含んだ突風は山の中腹の教会

まで駆け上ってくる。

ヨシは長い時間じっと灘を見据えていた。自分の親や鶴江を強奪したこの流れの速い灘。大切な人たちを奪った灘を。

修道女として一人になったヨシは、二人分の仕事をこなすことになった。はじめは思うようにいかず、時間も足りなくなり、神父に手伝ってもらうこともあったが、しばらく経つとそれも問題なく出来るようになっていた。

神父は鶴江の事故の後、とにかく心身ともに憔悴していた。傍目にもそれは一目でわかるものであった。ヨシは神父が毎晩夜中にひっそりと祭壇に祈りを捧げ泣いているのを知っていた。

今までの普段の自分たちへの淡々とした接し方と、鶴江が無くなったことへの神父の悲しみ方の深さに何某かの違和感もあった。

鶴江の残された私物や衣服類をどうするかと神父に尋ねると、全てまとめて持ってくるように指示された。疲弊の色を隠せぬ顔の神父は、その一つ一つを愛おしむ様に手に取り、時間をかけて丁寧に箱に入れ、自室の箪笥（たんす）へとしまい込んだ。ヨシは感じてしまった違和感を飲み込み封をした。

ヨシの増えた仕事の一つに朝夕定刻での鐘つきがある。神父がやると言ったのを無理やりヨシが取り上げた。神父の足も鐘を突くたびにふらつくのを知っていた。

軽い高音の教会の鐘の音は、善長谷を起点として裏の山へ下の漁村へ、そして灘の向こうの香焼島へとカランカランと響き渡る。

ほぼ刻（とき）を同じくして対面の香焼島の円福寺からも重厚な低い音の鐘の音がゴーンと響いてくる。最初に気づいたときは、その鐘の音に何も感じなかったが、ふとそれは春嬰がついているのではないかと思うように

なった。

まず自分が鐘を突きしばし待つ。するとやがて向こうから低い鐘の音が聞こえる。

また向こうの鐘の音を確かめる。終わった頃にこちらが鐘を突きはじめる。あたかも会話でもしているようにリズミカルな現象がおこるのだ。

この密かな楽しみはヨシの心を躍らせた。ヨシは毎日、朝日を背に鐘を打ち、夕日に向かって鐘の音を響かせた。

鐘の音は朝日の光と共に対岸の島へ届き、夕日の光に乗ってこちらに帰ってくる。光に音が乗り、その音に想いが乗っている。そう思えた。春嬰が実際に寺の鐘を打っているかどうかなどどうでもよかった。ヨシの打つ音の先には灘があり香焼島があった。春嬰があった。ただそれでよかった。

二年ほどの月日が経った頃、村人づてに噂を聞いた。春嬰がどうも香焼島を離れるということだった。

鐘の音に想いを乗せ始めた後、春嬰とは一度だけばったりと遭ったことがある。

下の漁村に使いで行った際、春嬰は住職に付き添う形で大きな風呂敷を抱え桟橋から上がってきたのだ。

深堀村には香焼の円福寺と同じ宗派の寺がある。おそらくその関係でこちらに来たのだろう。

住職はヨシの姿を目にすると無表情のまま軽く会釈をして通り過ぎた。ヨシも慌てて会釈したが少し遅かった。小坊主の春嬰は近くまで来ると、じっと見ていた目を逸らすことなくニコリと笑い会釈をした。真っ青な坊主頭に汗が浮かぶ。近くをすれ違うと微かに線香の香りがした。春嬰の目の奥には密かな喜びが見えた。奥の光が何かを語っていた。

共通の時間を持って音で会話してきた二人にしか把握できない閃き。二人は黙視での会話をした。

一瞬のつながりは、長い時間と二人の想いの同化を確証させ、全ての想いと行いを結びつけ大きな喜びとなった。無言のままで、二人はこの灘を挟んだ鐘の音色による長きにわたる会話の意味を理解した。理屈ではなく、分かったのだ。二人だけにはその真実が確信できた。密かに分かったことが喜びを深くした。

教会の鐘の音と寺の鐘の音は、いっそう毎朝夕、黄金の陽の光と共に灘を包むように嬉々として波間を乱舞した。

実際に顔を見て確信した喜びの時から、数か月後の突然の春嬰の移動の噂であった。

ヨシは春嬰がすでに鐘を突かなくなっていることは分かっていた。気が通じている相手とそうでない相手であることくらいはすぐにわかる。

自己の力の及びようがない落胆と、言葉すらも交わすことなく瞬時にして消えゆく大切な存在への悲しみだけが残った。神に

祈る気持ちにも、懺悔する気持ちにもなれなかった。灘を見下ろすマリア像にそっと手を触れると嗚咽とともに熱いものが頬をつたった。潮風が冷たく吹き上げ涙を乾かした。

後日、春嬰は修行のため永平寺（えいへいじ）へと旅立って行ったことを中年の野菜売りの女から世間話として聞き出した。

もしかしたら春嬰がわざと移動の詳細を野菜売りの女に語ったのかもしれなかった。それが噂となってヨシに伝わるように仕組んだのかもしれない。そのくらいの機転は利きそうな気がした。

二十年ほどが経った頃、香焼島円福寺の住職が亡くなり、代が変わるとの話を耳にした。

ヨシはさして気にも留めなかったが、次の住職が春嬰であることを聞くと、驚くほどの胸のざわつきを感じた。自分の中では

とっくに心の深くに埋め込んで蓋をした感情だった。

そう、自分は神と共にいる。イエス様の子として、その妻として、その手足として存在するのみ。

あの頃の自分はまだ未熟だった。拙(つたな)かった。今の私はこのようなことで惑わされることはない。

ヨシも四十を数えるまでになっていた。数年前に神父を亡くしたこの教会もまた、ヨシが修道女として一切を取り仕切っていた。

山の中の木々に囲まれた静かな教会は、鳥のさえずりと共に穏やかな朝日を後方の山際から受け一日が始まる。自分と同じような育ちの修道女を二人抱えた教会は、規則正しく世間とは隔離された時を刻んでいた。

そして数か月後、長崎の大波止(おおはと)の港から深堀村を経由して香焼島へと向かう連絡船

で、ヨシは春嬰を見つけてしまった。

遠目からでもすぐに分かるそのうなじと坊主頭の絶壁は昔と変わらなかった。聖職者としての凛とした雰囲気は漂うものの、ヨシが昔見た小坊主のような若さがどこかに感じられて嬉しくなった。

素知らぬ顔で桟橋で船を待つヨシに初めに声をかけたのは春嬰であった。ヨシは意外だった。自分のことなどとうの昔に忘れていて当然だし、今までも話したこともない。初めて会った他人となんら変わりはないはずである。

春嬰との会話はごく自然にすすんだ。ヨシは初めて話す人とは思えないくらいに春嬰の話にのめり込んだ。

たわいもない世間話や旅の話、他の地域での人々の暮らしなどの話の中に春嬰の人柄を探し求め、優しさを発見し、愛情のかけらを見つけようと懸命になって聞き入った。

数十年前の乙女の如き感情が頭を持ち上

げては波立つ。

心の色の変化を抑え平素を装い続けようとする自分の滑稽さが可笑しくなってきた。春嬰は妻帯していた。子供も二人いた。当然のことだと思った。自分たちとは違い、仏教の僧侶は多くが妻帯する。仕方ないのだ。一度は抑え込んだ感情。これでまた完全に自分の気持ちを抑え込む力が悪魔の惑わしに勝るはず。微笑で会話をしながらも、自分の感情のざわつく状態を確認できる年齢になったのだ。

ポンポン船は先に深堀村につき、その後、灘を渡り香焼島に向かう。ヨシが礼を言って席を立とうとすると、春嬰が爽やかに言い放った。

「私は毎日、鐘を突こうと思います」

ヨシに電撃が走った。やはり一言も言わなくても分かっていたのだ。忘れてもいないのだ。またあの一時を持てるのだ。

「では、わたしも……」

とっさに答えると、逃げるようにして舟のタラップへと小走りし桟橋に飛び降りた。ヨシは動悸が激しくなり、体中が熱くなる情動を抑えることができなかった。

桟橋から波止場に出るといつもの日常があった。夕暮れの中、漁師たちはせわしなく水揚げ作業に追われていた。善長谷へくねくねと続く長い山道は陽が落ち始めると冷えた空気を忍ばせてくる。真横から射す夕日の光と木陰の冷気の中、ゆっくりと坂を上る。ヨシの心も落ち着きを取り戻していった。

春嬰とヨシが顔を合わせることはほとんどなかった。

お互い外出する機会も少なかったのと、島と僻地という土地柄や二人の宗教観からも多くの人々との交流をあまり好まなかった。

二人は数年に一度ほど、長崎市街や連絡

船で顔を合わすこともあったが、それぞれに小坊主や修道女がついており、話をする機会はなかった。

ただ、朝夕の教会と寺の鐘の音は絶えることはなく、挨拶でもするように、時には語らうように、しんみりと何かを愛おしむ様に、互いの音を癒すように、励ますように、讃えるように流れの速い香焼灘の上にこだました。

やがて、村民や信者の中にもまるで会話でもしているようだと不思議がる者もいた。二つの漁村の大人も子供も、軽く高い音と重く低い音の織り成す不思議な世界に知らず知らず取り込まれてしまう。

やわらかく透き通るような音の響きに包まれる朝夕の一時の香焼灘の空間。

密かに二人が創り出す愛の伝播（でんぱ）で、空は黄金色の薄い雲を広げ、海の波は白銀色に乱舞していた。

ヨシは夜の風雨の中、坂道を慌てて駆け下りていた。泥水が跳ねて足元を汚す。深堀村の漁港に着くと波止場に行き周囲の人たちに様子を聞く。

香焼島に使いに出した若い修道女が帰ってこないのだ。連絡船はお昼過ぎに欠航しており、人手も少ない。春の嵐だった。ヨシは真っ青になっていた。鶴江の一件が頭をよぎる。あの時と違い、連絡船に乗ってさえいなければあの子は大丈夫なはず。

陰ノ尾島の教会が気を利かせて滞在させてくれているだろうか。不安な思いは次から次にあふれ出て止めることができない。悪い方にばかり思考が回ってしまう。

春の嵐に対する恐怖は、他の人には理解できないトラウマとなってヨシにのしかかっていた。

そんな時、雨合羽を着て自転車に乗った若い郵便局員が桟橋のヨシを見つけて駆け寄ってきた。

「シスターに電報です。香焼島の郵便局からですね」

雨に顔を濡らした若い郵便局員は愛嬌ある笑顔を見せた。白い歯が見えた。

ヨシは雨に濡れないように近くの商店の軒先に入り、傘を畳むと急ぎ電報に目を通した。

『バンヂアンシンサレタシ　シュンエイ』

春嬰だ。あの子は春嬰の所にいるのだ。春嬰が預かってくれているのだ。ヨシは、一気に身体中の筋肉の緊張が解け、しゃがみ込みそうになった。安堵感と共に湧き上がる熱いもの。本当に困った時にはサッと現れてくれるのだ。何かで通じているのだ。

翌日、昼過ぎには春の嵐も治まり連絡船も運行し始めた。

若い修道女は何事もなかったように元気に帰ってきた。早歩きで坂道を登ってきたのか息が切れている。ヨシは歓喜の気持ち

を読み取られないように微笑で迎えたが、我慢できずしっかりと若い修道女を抱きしめた。修道女はヨシに身体を預けた。若い修道女は、長崎市街の出身で火事で両親を亡くしたキリスト教徒の子だった。神様からお守り頂いたこの子の命を自分が預かっている責任は重いと常々思っていた。

若い修道女は、事の成り行きを興奮気味に話して聞かせた。

連絡船が急に欠航になり、香焼島の波止場で困り果てたところに、法事を終えて帰路についていた春嬰が通りかかったようだ。

陰ノ尾島のキリスト教会までは、かなり距離もあり、この暴風雨での移動は危ないので近くの円福寺に泊まっていくように勧められたということだった。

寺では丁重に扱われ、夕食の後は御供えのお菓子などもいただき、非常に楽しかったと話すと思い出したように布のカバンの中から一通の手紙をヨシに差し出した。

ヨシは頷きながら両手で受け取ると自室に戻り封を開けた。

『大塚（おおつか）ヨシ様　この度は勝手に修道女様を寺にてお預かりしましたこと、どうかご容赦ください。宗教上の違いから戸惑われたこともあったようですが、貴方様の普段のご様子などもお聞きすることができ、当方としては楽しい時間でした。貴方様が育てられている故、さすがに素直で明るく素晴らしい才女であると感心いたしました。また鐘の音にてお逢いしましょう。春嬰』

大した内容もない手紙であったが、ヨシの胸からは止めていた何かが込み上げてきた。

『春嬰様　先日は私共のシスターが大変お世話になり、誠にありがとうございました。春嬰様のご慈悲と異教徒であるシスターへのお気遣いに心から感謝申し上げます。私

の普段の生活などについてもお話をされたとのこと。お恥ずかしい限りですがありのままでございます。質素な山の生活と祈りの時を送る毎日でございます。ただ、困ったことに一日に二度ほど心が湧きたち自分でもどうしようもない時がございます。鐘の音に乗って訪れる貴方様の想いは罪でございます。その罪に乗って私も罪を犯してしまいます。善長谷での生活は素朴な自然の中に深淵な時間を送ることを善しとしています。その静けさを貴方様への想いは波立てます。まるで春の嵐のように私の心はかき乱されてしまいます。時には夢に現れ、頭から離れず、胸が射すように痛く、それでも貴方様の姿が消えぬ夜がどれだけあったでしょう。鐘の音の向こうに貴方様がいると思うと、なぜ少女のように浮足立ってしまうのでしょう。この辛さが貴方様に分かりますか。修道女である私がこのような状態にあるという事は私は堕落した者であるの

です。本来ならば懺悔を神父様に行うべきとこでしょうが、堕落しきった私は恥ずべきことにそれすらもできず、また今日も鐘を打ち続けるのです。長く信仰生活などを続けますと、人間としての性（さが）は抑え込めているように勘違いをしてしまいます。しかし、貴方様の存在はそれが戯言であると、そんな綺麗ごとではないという事を嫌というほど突き付けてきます。人間が罪人と聖書は言いますが、なるほどその言葉に真っ向から反論することはできません。私は女として産まれた以上、男を求める性は捨てることはできないのでしょう。それでも良いのです。私は地獄に落ちるでしょう。それでも貴方様を想うでしょう。その強い想いは限りなく続いて鐘の音と共に香焼島へと届くことになります。お覚悟くださいませ。書き始めると止まらなくなってしまいました。どうかヨシの一生に一度の貴方様への恨み言であるとお聞き流しくださいませ。このよう

なふしだらな手紙がご家族様などの目に触れてはつまらぬ災いの種となります。ご一読の後はこの世に残すことなくすぐに焼却くださいませ。善長谷　ヨシ』

夜中に手紙を書いてしまったため、感情も高ぶり、書かなくてよいことまで書いてしまったとかなり後悔が残る。

どうしたものかと自己嫌悪に陥りながらも半分やけくそになっていたヨシは、エイヤッと勢いで赤い郵便ポストに投函してしまった。

どうせ最初で最後の手紙だと開き直り、どこかすっきりとした気持ちと、まだ治まりのつかない沸々とした怒りに似たものを誤魔化そうと駄菓子屋で甘納豆と干し芋を買い帰路についた。

さらに二十年ほどがすぎ、日本では戦争が続いていた。

香焼島にも軍需工場ができ、香焼島の港はにわかに賑わいをみせていた。

香焼島の片隅には粗末な木造の捕虜収容所が作られ、敵兵の捕虜たちが収容されていた。この辺りの空襲警報が頻繁なのは、この収容所の様子の確認や軍需工場の偵察のために敵機が来るのであろう。

米軍の戦闘機は、香焼島に急降下してくると機銃掃射にて工場近くの海岸を無差別に銃撃した。その後、対岸の深堀村の漁港に近づき桟橋あたりを銃撃する。一般人の連絡船での移動もおいそれとはできないようになっていた。山の中腹にあるヨシのキリスト教会は十字架やマリア像が見えるからか銃撃されることはなかった。

そんなある日の昼過ぎ、ひょっこりと春嬰が善長谷教会へと顔を見せた。ヨシは黒い修道服の上からすっぽりと白い割烹着を着て野良仕事をしていた。

驚きはしたものの、以前ほど動揺をする

ことはなかった。ヨシは灘を見下ろす縁側へと案内し、ゆっくりと茶をすすめた。二人とも齢（よわい）六十を数えるほどになっていた。

「ここからは香焼島は丸見えですな」

「はい。しっかりと」

「このマリア様は海を眺めてますな」

「はい。海の安全と、香焼島を……」

「円福寺の弘法大師様もこちらを向いています」

「いつもですか」

「いえ、一年に三日ほど。四月の弘法大師祭りの時だけ祠の扉が開きます」

「そうですか。マリア様はずっと香焼島を観ています。弘法大師様はたったの三日のみ。まるで住職様のようです」

「これはまた意地悪な」

春嬰は一本取られたとばかりに後頭部へ右手を当てた。小坊主のように照れていた。

「私は曹洞宗でも空海が好きです。だからいつも空と海、そしてその先の山の中腹、善

長谷を見ております」

「うれしゅうございます」

春嬰の少し伸びた坊主頭は白髪となり、顔には深いしわが刻まれていた。肌の張りこそ無くなったが色艶はよく、絶壁頭は少し丸くなった背骨のせいか傾き気味だった。

禅の世界で永く坐り内観された精神は眼光となってその智慧（ちえ）を灯し、背面からもその人間性が溢れ出ていた。

ヨシは至福のうちにその瞬く間の時間の中に浸っていた。

春嬰は一つ小さく咳をすると柔らかな眼差しでヨシを見つめた。

黙視にて何かを語ると木漏れ日が知らぬ間に薄れるように自然と席を立った。踏み出した足が落ち葉に触れ音を立てた。

半年後、春嬰の死がヨシの耳に入った。

肺病と聞いた。ヨシは驚かなかった。春嬰がわざわざここまで足を運ぶにはそれなりの

理由があると思うし、それを言わないということはそういうことなのだろうと思う。

春嬰はあの時、忘れ物をしていた。水晶の数珠が座っていた足元に落ちていた。

「わざとだったのかしらね……」

春嬰の小坊主の時のいたずらっぽい笑顔が数珠の水晶の中に浮かんだ気がした。

春嬰の形見として黙って貰っておくことにした。また一つ罪を重ねたのかもしれない。

ヨシは初めて神にではなく香焼島へ向かい祈りを奉げた。

光沢のある黒っぽい大島紬を品よく着こなしたふくよかな女性が善長谷を訪れたのはそれから二月ほどが経った頃だった。

戦争が激しくなった後、もんぺ姿以外のきちんとした着物姿の女性は久しぶりに見た気がした。白髪交じりで藤色の風呂敷を抱えた女性は、ヨシを見つけると近づいて

きて一礼した。

ヨシは修道服に胸までの白いエプロンを着け白髪交じりの肩ほどの長さの髪を束ね、竹箒を持って教会の前の落ち葉を掃いていたが、手を止めて応対した。

「ヨシ様でいらっしゃいますか」

大島紬の女性にいきなり名前を言われて戸惑った。少しシミや皺は出てきたが歳の割には白さを保った清楚なヨシの顔立ちに緊張が走る。

「はい、そうですが、どちら様ですか」

「私は香焼島の円福寺住職春嬰の妻でございます。突然お伺いし失礼いたしました」

女性はもう一度、頭を下げた。

「そうでしたか。春嬰様の……」

ヨシは動揺を見せまいと反射的に身構えた。平常心ではないことを読み取られまいと作り笑顔になる。動作が意図せずゆっくりとなっていた。

女性は一直線にヨシの目を見据え、挙動

を観察している。目に力のある女だった。

「どのようなご用件でしょうか」

ヨシは言葉を選びながら静かに問いかけた。緊張のあまり口の中がカラカラになるのがわかる。必死でこらえとにかく言葉を吐きだした。

女性はヨシの心の揺れを読み取ったことを確信したかのように、薄く笑みを含むと近寄って風呂敷から丁寧すぎる動作で菓子折りを出し手渡してきた。

「ご時世がらこんなものしかありませんが。春嬰が生前お世話になったようですのでご挨拶だけでもと思いまして……」

ヨシは戸惑いながらも竹箒を身体に立てかけ両手で丁寧に受け取った。

「どうぞお茶でも」

ヨシは若い修道女を制すると自ら縁側に促した。以前、春嬰が座った場所に座らせ、お茶を取りに炊事場へと向かった。

二人分の茶を沸かし、待つ間に一口水を

飲んで深呼吸をした。

いくら想いを巡らせても春嬰の嫁がやってくる理由が分からない。

「お待たせしました」

お盆に二人分の茶を載せ、平静を装いながら女性の元へと運ぶ。

「急に押しかけてすみません。ここからは香焼島がよく見えるんですね」

「はい」

訝(いぶか)しい気持ちを隠せず、ヨシはどうしても短い言葉を冷たく放ってしまう。

「なぜ私がきたのかと困らせてしまって御免なさい。どうしても貴方様のお顔が見たかったのです」

「え、私をですか」

ヨシは混乱のあまり何を言っているか分からない。ただ顔がこわばっているのは自分でもよくわかる。どうしてもってどういうことだろう。

「もう随分前ですが、私、貴方様からの手紙

を見てしまったのですよ」

ヨシは衝撃で頭が真っ白になった。

視界は一瞬暗くなったようにすら感じる。

「ああ、もちろん中身ではありません。差出人が貴方様となっているのを見ただけです」

女性はすまし顔でさらりと言ってのける。

「でも、どうしてそれが私のことだと……」

「ちょうどあの時は嵐でお宅の若い修道女様がお泊りになったでしょう。だからヨシ様の名前が話の中に何度も出てきたのですよ」

ああなるほどと、ヨシは事の成り行きをやっと理解した。

「その節は本当にありがとうございました。春嬰様のみならず奥様のお手も患わせてしまいまして。あの手紙はあの時のお礼だったのですが……」

ヨシは何とか取り繕おうと試みた。

「それは分かっております。そうだろうと思っていました。ただ、あの日、手紙を読ん

だ後、住職は落ち葉を燃やす焚火を自分で燃やしておりました。普段は小坊主がするのにです。おかしなことをするなと思い見ていると火に手紙をくべていたのです。それがあの手紙だと直感的に分かりました。遠めに見ていたのですが、その姿が何とも寂しそうで、子供が大切なおもちゃでも手放す時のような、切なくうな垂れた姿だったものですからずっと気になっていたのです」

「そうでしたか」

ヨシは思考が停止したまま香焼島を眺めている。二羽のトンビが風に乗ったまま高く舞っている。

トンビの鳴き声は小さく、長く響いていた。

「そんなことがあった後、私しばらくして気づいたんですよ。夕飯の支度をしている時刻なんですが、この寺の鐘の音に応えるように遠くで高い音の鐘の音が響いている

ことに。それが耳をすましていると、何か会話でもしているような、それでいて心地よく癒されるような、二つの鐘の音が絡まりながら何とも言えない雰囲気をつくっていることに……」

ヨシは何も言えなくなっていた。色が剥げて茶色い革が見え始めた小さい黒い革靴のつま先に目を落とす。

「住職は用事で寺を留守にするとき以外は必ずと言っていいほど自分で鐘をついていました。それもこの善長谷を見据えて……」

ヨシは顔をあげることもできず手元の茶柱を見つめている。茶碗を落としそうになるくらい身体に力が入らない。

「私は貴方様を責めるつもりなどはないのです。ただどのようなお方かと気になり、我慢が出来ずにお顔を拝見しに図々しく伺ったのです」

ヨシはとぼけてやり過ごそうと思ってもみたが、それも不自然な気がした。むしろこ

の女性には素直に自分の気持ちも伝えた方が良いのではないか。

世間的に責められるようなことは何一つないのだし、この女性は自分と春嬰との繊細なやり取りを誤魔化してすむようなタマでもないような気がした。

「奥様の御察しの通りでございます。あの手紙には私の想いが書かれていたので、読んだらすぐに焼き捨てるようにお願いしました。周りに会話するように聞こえていたかどうかは分かりません。そこをどう解釈するかはご自由ですが、少なくとも私が愛おしさを込めて鐘を打ちその音に乗せて想いを送っていたのは事実です」

女性は一言も聞き漏らすまいと耳に神経を集中している。一方で視線はぼんやりと足元の少し先に生えるタンポポに向いていた。

「修道女としては堕落した思いと行いかもしれません。でも私は人間として、一人の女

としての性には逆うことはできませんでした。無理だと思ったのです。綺麗ごとではない、一人の女としてのささやかな楽しみであり喜びのひと時を求めていました。でもどう求めても叶わないこともあります。ですから、せめてもと毎日鐘を打ち、その互いの鐘の音に癒され、救われてもいたのです」

普段は言葉少ない生活を送っているヨシが一気に思いをぶちまけるように心の中を吐露してしまった。ヨシは顔を上げ、澄んだ黒い瞳はしっかりと相手を見ていた。春嬰の妻は遠く香焼島を眺めると両手で丁寧に茶碗を口にもっていった。紅も塗っていない薄い唇だった。茶碗から口を離すと静かに細い息を吐いた。

「貴方様がそこまで本心を話してくれるとは思いませんでした。少しくらいは見えないものを感じることもあれば、人様の本心が分かることもあります。貴方様が嘘を固めるような方

であったならば、私はそれを暴こうとしたかもしれません。でもやはりそうではないようです。遠く善長谷に立つ透明な貴方様の存在が春嬰にはいつも輝いて見えたのでしょう。私にもそのことが直感的にわかってしまったのでしょう。突かれる鐘の音によって……」

そんな言葉が返ってくるとは思わず、ヨシはまた顔を上げられなくなった。

「貴方様は、ほとんど春嬰と話すこともなかった。姿を見ることもなかった。ましてや交わることも手を握ることもなかった。それなのに春嬰は半世紀も貴方様に魅かれ続けた。本当にどうしようもない馬鹿な男です。だからこそ、私は貴方様に嫉妬します。心の底から悔しく思います」

「でも、私はほとんどお会いすることもなく……」

「だからなのです。接することもなく、想いだけを何十年も続けることなどよほどでな

いとできません。指一本触れることなくそれができるという事は、それだけ愛おしさが深いという事なのです。私が遠く及ばないところに二人がいたという事なのです」

春嬰の妻はそっと茶碗を盆に戻した。ハンカチを取り出し鼻に当てる。

「貴方様が限りなく大切だからこそ、あの人は近づくことなく貴方様を想い続けたのです。あの人の本気度に私は嫉妬しているのです。ちょっとした浮気であったり、遊女と遊んだりしたことを聞いても、このような心の嵐は起きません。私の至らないこともあったでしょう。そう思って自分を責めることもありました。でもどうにもならないのです」

女性の声は涙声から嗚咽へと変わっていた。ヨシは右手首に巻いた水晶の数珠の珠に指先で触れていた。

「何度、人が見ていないところで皿や茶碗を叩き割って感情を爆発させたことでしょ

う。割烹着の袖を握りしめ、血が出るほど唇を噛んだでしょう。春嬰の身体は香焼島にありました。だからこの人はいつも私のもとにいる。何があっても帰ってくるというのが私のせめてもの安堵でした。しかし、精神は、心はいつもこの灘を飛び、鐘の音に乗って善長谷と香焼島を行き来していたのです」

下瞼に溜まっていた雫が瞬きと同時に一気に零れ落ちた。

ヨシは女性の目線を感じ、慌てて手首の水晶の数珠を隠した。

「いいのです。あの人の形見として貴方様が持っていてあげてください」

「いえ、これは春嬰様が落として忘れていかれて……」

「いいえ、それは貴方様に置いて行ったのです。僧が数珠を忘れることはありません。春嬰は貴方様に持っていて欲しかったのです。あの人らしい心配りの仕方です」

女性はしばらくの間、ハンカチを鼻に当てていた。

けたたましく山鳥が鳴き長い沈黙を破る。女性は少し落ち着くとハンカチを顔から離し、ゆっくりと教会の出口へと歩き出した。

ヨシは慌てて後を追い歩み寄った。大島紬からうっすらと幾何学模様が浮き上がっていた。織の細かく詰まった目だった。

春嬰の妻は、お会いできて本当に良かったと感謝の言葉を残し一礼した。ヨシは深々と礼をして見送った。ヨシの白髪交じりの束ねた髪が数本ほつれ風で頬に張り付いた。女性の後ろ姿を見つめるヨシは晴れ晴れとしたような、凛とした顔になっていた。

しばらくして円福寺は春嬰の息子が住職に就任したと伝え聞いた。

香焼灘の変化に気づいたヨシは若い修道女に尋ねた。春嬰が亡くなって二十五年近

くの月日が経っていた。

香焼島と深堀が埋め立てられ、財閥系の企業が進出して世界一の規模の百万屯（トン）ドッグを有する造船所が作られるようだということを聞いた。

日本は朝鮮戦争の特需もあり、復興の旗が勢いよく振られ、消費も拡大し大型のタンカーや商船が必要とされていた。

平和な時代になっていた。香焼灘には埋め立て工事により毎日ダンプカーが大量の土砂を運び込んでいた。この海が灘でなくなる。

ヨシは一瞬戸惑いを見せたが、善長谷から香焼までの湾は残るということを聞くと少し安堵の表情を見せた。

「シスター、香焼島と深堀が埋め立てで繋がるらしかですよ」

「香焼と、深堀がねー。つながる。つながるとね……」

若い修道女は一日に何度かヨシに同じ説

明をした。一週間ほど寝込んだヨシは重い肺炎と診断された。

善長谷から見える香焼灘では日に日に埋め立て工事が進んで香焼島は陸続きとなってきていた。視力の落ちたヨシの目にはその様子はもうほとんど見えなかった。

潮風は容赦なく岸壁から善長谷の前の竹林をかけあがりベッドのある窓際まで吹き付ける。山の峰沿いに吹いてきた風は強い横風となって周りの木々を揺らした。春の嵐が来る気配を感じた。突然始まる風雨は漁師でもその判断を誤ることが多い。

ヨシは目が見えなくても風の音と運ばれてくる匂いでその気配を感じとっていた。大切な人たちを奪っていったあの嵐を。

「香焼と深堀がつながるとですよ……。善長谷と、つながるとですよ。やっと、つながるとです」

ヨシは激しくなりだした風雨の向こうに

浮かぶ香焼島の方を見つめながらつぶやいた。見えぬ目で見えぬものを観ていた。ベッドに横たわるヨシの目尻から皺をつたって雫が耳たぶへと落ちる。

右手の皺の深い緩んだ指に水晶の数珠が力なく握られていた。

享年九一歳だった。

了